神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	東京湾沿岸地域出土の貝刃について
著者	神沢勇一・川口徳治朗
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告　第 4 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1971 年（昭和 46 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

東京湾沿岸地域出土の貝刃について

On the Shell Blades at the coastal area of Tokyo Bay

神　沢　勇　一・川　口　徳　治　朗

Yūichi Kanzawa • Tokujirō Kawaguchi

1

貝刃は2枚貝の腹縁を加工して刃器として使用したもので，縄文時代の貝塚から発見される貝製品の一種である。いまのところ，上限は花輪台Ⅱ式土器[注1]に，下限は安行Ⅰ式土器[注2]に伴出することが知られており，また地域的には北海道から九州まで分布するもののようであるが，東京湾沿岸および仙台湾沿岸[注3]に集中している。

貝刃の在り方については，これまでに論じられることが比較的少く，二，三の見解が提示されているに過ぎない。しかし，近年，一遺跡から100例前後が一括出土する例もみられるようになり，貝刃の性格や機能あるいは年代的な位置[注4]を改めて考える必要が生じてきた。

さきに，我々は神奈川県・梶山貝塚から花積下層式土器に伴って出土した約100例の貝刃について調査した結果，形態と加工法に二，三の種類があり，またそれらの間にはある程度一定の組合わせが存在することが認められた。このことは貝刃が一種の道具として存在したことを推測させるものであった[注5]。そこで，この結果を確認するため，類例を求めていたのであるが，その後東京湾沿岸の数遺跡から一括出土した貝刃を実見する機会に恵まれ，若干の知見を得ることができた。そこで，とりあえず東京湾沿岸という1単位をとって，梶山貝塚出土例の検討結果と比較しながら，貝刃について二，三の考察を行ないたいと思う。

なお，本稿については，横須賀市博物館，明治大学考古学研究室ならびに塚田光，熊野正也，後藤和民の諸氏に資料の提供をはじめ，種々のご助言を賜わった。稿を起すにあたり，記して厚く感謝の意を表わしたい。

2

本稿にとりあげた資料の総数は589例で，実見した585例に，報告書により出土状態ならびに細部の形状を具体的に察知し得るもの4例を加えた。遺跡別例数，時期は次のとおりである。

吉井城山第1貝塚[注6～9]（神奈川県横須賀市吉井町台崎）　49例　茅山上層式，加曾利EⅡ式・Ⅲ式

梶山貝塚（神奈川県横浜市鶴見区上末吉町梶山）	101例	花積下層式
北川貝塚（神奈川県横浜市港北区新吉田町北川）	42例	花積下層式，諸磯ａ式
マカンド貝塚（神奈川県横浜市港北区新羽町）	26例	諸磯ａ式
向台貝塚（千葉県市川市本八幡）	150例	勝坂式，阿玉台式，加曾利ＥⅠ式・Ⅱ式
今島田遺跡（貝塚）（千葉県市川市柏井町）	35例	加曾利ＥⅠ式・Ⅱ式
加曾利北貝塚（注10）（千葉県千葉市桜木町京願台）	77例	加曾利ＥⅠ式・Ⅱ式
加曾利南貝塚（千葉県千葉市桜木町京願台）	95例	加曾利ＥⅠ式・Ⅱ式，堀の内式，加曾利Ｂ式，安行Ⅰ式
称名寺貝塚（神奈川県横浜市金沢区金沢町）	2例	称名寺式
子和清水（こわしみず）貝塚（注11）（千葉県松戸市子和清水）	8例	勝坂式，阿玉台式，加曾利ＥⅠ式
※鴇崎（ときざき）貝塚（注12）（千葉県佐原市鴇崎）	2例	花輪台Ⅱ式
※鉈切（なたぎり）洞窟（注13）（千葉県館山市浜田）	2例	称名寺Ⅰ式

（※は文献による資料）

以下，前述の課題に従って，素材，形態，製作技法に重点をおきながら，資料の比較検討を行なっていくことにする。

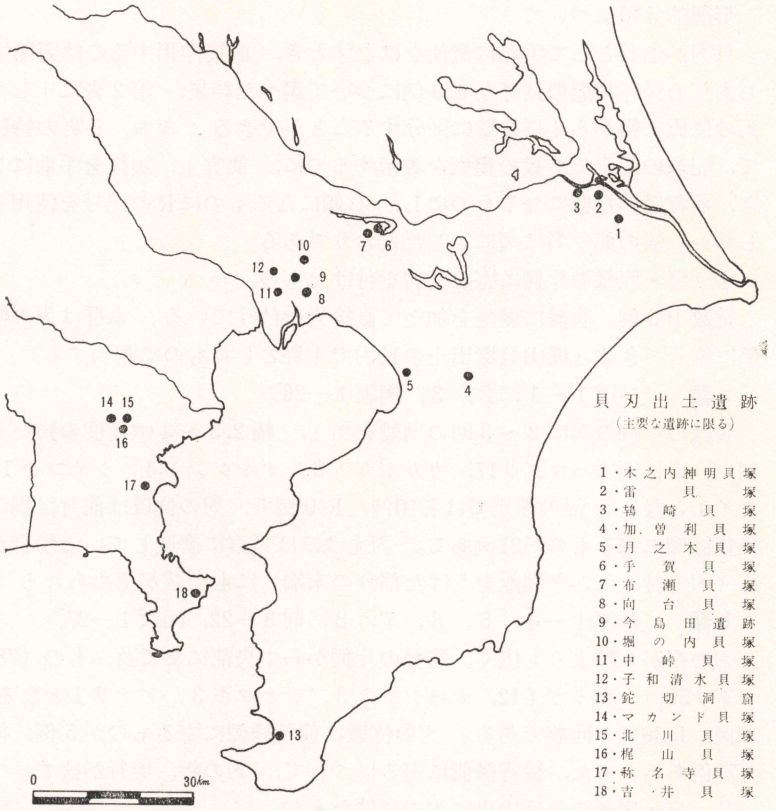
素材について

貝刃に使用された貝の種類は第１表に示したように，資料総数589例のうち，チョウセンハマグリ・ハマグリ＝380（64.2%），カガミガイ＝120（20.5%），シオフキ＝34（5.8%），オキシジミ＝22（3.8%），ミルクイ＝14（2.4%），アサリ＝10（1.7%），バカガイ＝5（0.9%），ウチムラサキ＝3（0.5%），サルボウ＝1（0.2%）となっている。

全体として，チョウセンハマグリ・ハマグリが最も多く約３分の２を占める。とくに梶山貝塚の場合には93%という圧倒的な割合を示しているが，発掘時において，検出されることが他の貝殻より比較的容易である点を考慮しなければならないかとも思われる。しかし，一方，北川貝塚，マカンド貝塚，今島田遺跡（貝塚）にはとくに顕著な例ではない。

チョウセンハマグリ・ハマグリに次いで多いのがカガミガイである。全体的にみるとその割合は低いが，今島田遺跡（貝塚）においてはハマグリの約２倍を占めている。シオフキはすべての遺跡に存在するものでないが，北川貝塚の場合はハマグリの約２倍になっている。オキシジミは貝刃の素材の中で最も殻のうすい貝で，シオフキ同様に全体としては数は少ないけれども，マカンド貝塚ではかなり目立っており，その数はハマグリを上回る。バカガイとウチムラサキは吉井城山第１貝塚だけにみられる。ミルクイは加曾利南貝塚の後期に８例とやや目立った存在を示している。なお，ミルクイ製の貝刃は刃部の剥離が明瞭でないが，殻がうすいため，刃部加工をせずに，そのまま使用されたことも考えられる。

次に貝刃の大きさは，使用された貝の種類そのものによってある程度の制約をうける。仮に貝刃の大きさを腹縁の端から端までの直線距離によって区分すると，チョウセンハマ



グリ・ハマグリでは5㎝以下が9.2%，5～6㎝が40%，7～9㎝が41.6%，9㎝以上が9.2%となり，7～8㎝のものが70%を占めている。ただし，北川貝塚，マカンド貝塚の場合は5㎝以下の貝を多く用いているという特徴がみられる。カガミガイには5㎝以下および9㎝以上の例はなく，5～7㎝が120例中116例（99%）を占める。シオフキ，オキシジミ，アサリなど小型の貝は特殊な例を除いて5㎝以下となっているが，これは貝そのものの大きさによるものであって，大きさに特別な意味をみいだしがたい。バカガイ，ウチムラサキ，ミルクイ，サルボウは第1表から知られるように，きわめて少なく，特殊な例とみてよいと考えられる。

以上述べたように，貝刃の素材としては7～8㎝のチョウセンハマグリ・ハマグリと5～7㎝のカガミガイがきわめて特徴的な存在であるといえよう。これらはいずれも殻が厚く，刃を付けるのに適しているためと考えられる。しかしながら，北川貝塚，マカンド貝塚，今島田遺跡（貝塚）のように比較的淡水産の貝が繁殖した地域では，ハマグリが出土した貝の主体を占めてはいるが，6㎝以下の小型であり，あまりその成育に適さない環境にあったと考えられる。それに代わるものとして，今島田遺跡（貝塚）ではカガミガイが使用され，北川貝塚ではシオフキが使用され，また，マカンド貝塚ではオキシジミが使用されたのであろう。

形態的分類について

貝刃が道具として実際に機能をはたすとき，直接作用するのは刃部である。589例のうち刃部の保存状態の良好な539例について調べた結果，第2表に示したごとく，これらは刃の位置と幅から4群8類に区分することができる。なお，各群の特徴をあげるについて，記載の都合で，殻の種別を表示するのに，便宜上，腹縁を手前にして殻を伏せたとき，前背縁が左側になるものにL，右側になるものにRの記号を使用して区別することにしたい。殻の部分名は図に示したとおりである。

Ⅰ　群・腹縁の片側に寄せて刃を付けたもの。

総数106例。腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている。本群は刃の幅によってａ，ｂ2類に細分できる（梶山貝塚出土の貝刃でⅠ群としたものに相当する）。

ａ類　<挿図1—1，2，3，図版1—26>

腹縁の片側の端に2～3回の剥離を加え，幅2.5～4㎝程度の狭い刃を付けたもの（29例）。素材別はハマグリ17，カガミガイ3，オキシジミ4，シオフキ1，アサリ3，ミルクイ1となる。殻の種別ではL10例，R9例で，刃の位置は前背縁側に寄るものが8例，後背縁側に寄るものが21例ある。刃先はほぼ垂直に磨滅している場合が多く，また刃の後縁（刃を付けたとき剥離をうけた部分の末端）にも磨滅が認められる（2，3，26）。

ｂ類　<挿図1—4，5，6，7，8，同3—22，図版1—27>

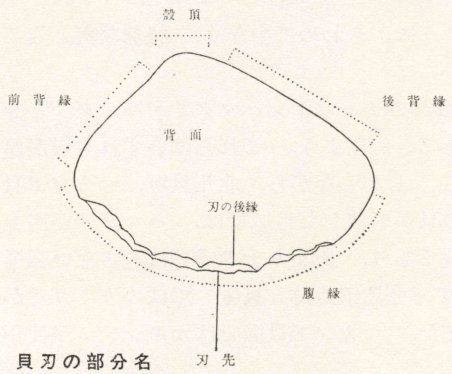
刃の幅がａ類よりも広く，腹縁の片側から中央部にまで及ぶもの（78例）。素材別はハマグリ59，カガミガイ12，オキシジミ3，シオフキ3，アサリ1となる。殻の種別ではL39例，R39例と同数である。刃の位置は前背縁側に寄るものが5例，後背縁側に寄るものが73例ある。また，後背縁側に寄るにつれて，刃の幅，奥行が狭まってくる（6，7）。

Ⅱ　群・腹縁のほぼ中央に刃を付けたもの。

総数355例。腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている。本群も刃の幅によってａ，ｂ2類に細分できる（梶山貝塚出土貝刃中Ⅱ群ａ，ｂ類としたものに相当する）。

ａ類　<挿図2—9，10，11，図版1—10>

腹縁中央部分に2～3回の剥離を加え，幅2.5～4㎝程度の狭い刃を付けたもの（27例）。素材別はハマグリ10，カガミガイ4，シオフキ9となる。殻の種別ではL18例，R9例で，ハマグリはLが多いのが目立つ。10は使用の結果，刃部および貝の背面がすれて擦痕を生じた例である。



貝刃の部分名

ｂ類　<挿図2—12，13，14，15，16，同3—23，24，25，図版1—15，同2—30，31，32，33>

腹縁のほぼ全体に剥離を加え，幅の広い刃を付けたもの（331例）。資料のうち約60％が本類に含まれる。Ⅰ群ｂ類の刃幅を延長した例（14）や，奥行きの深い例（23，24，25，33），浅い例（13，32）がある。素材別はハマグリ

210，カガミガイ89，オキシジミ5，シオフキ14，ミルクイ13となる。ハマグリは梶山貝塚の資料に1例，殻の中央に穿孔したものがある。カガミガイの中には，腹縁中央に比較的広い刃をもつものが10例ある。また，ミルクイはベンガラが付着した例がある。殻の種別ではL183例，R148例となる。このうちカガミガイはL82例，R7例で，Lが圧倒的多数であることに注意したい。Ⅰ群b類の延長形とみられる資料については，刃の位置がいくぶん後背縁側に寄っている。

Ⅲ　群・腹縁を大きく打ち欠いた部分に刃を付けたもの。

総数52例。背縁および腹縁の奥深くまで打ち欠いて刃を付ける点で，Ⅰ，Ⅱ群と異なる。粗雑な形状を呈するので破損品とみなされやすいが，刃としての形状，背面の損耗が明らかに認められる。本群は打ち欠きの状態によって，a，b，c 3類に細分できる（Ⅲ群a類は梶山貝塚出土貝刃中に例がないもので，b類はⅢ群a類に相当し，同じくc類はⅢ群b類に相当する）。

a類　<挿図3—17，図版1—28>

背縁の片側から大きな打ち欠きを数回加え，幅4～5㎝程度の刃を付けたもの（31例）。1般に刃の奥行きが深く，Ⅰ群a類と類似するが，刃の磨滅や背面の損耗の度合いは本類の方がはげしい。素材別はハマグリ21，オキシジミ1，シオフキ3，アサリ3，ウチムラサキ3となる。殻の種別ではL12例，R19例で，刃の位置は前背縁側に寄るものが2例，後背縁側に寄るものが29例ある。刃先はどの例においても丸く磨滅しており，刃の付く側の背面には擦痕が認められることが多い。

b類　<挿図3—18，図版1—29>

前背縁と後背縁の両側から大きな打ち欠きを数回加え，全体に刃を付けたもの（16例）。一般に奥行きが深く，菱形を呈する。本例はすべて梶山貝塚の資料である。素材別はハマグリ15，オキシジミ1となる。殻の種別ではL11例，R5例で，後背縁側に大きな刃が付く場合が多く，磨滅の状態や背面の傷み方はひじょうにはげしい。

c類　<挿図3—19，図版2—19>

腹縁を奥深く平均的に打ち欠き，全体に刃を付けたもの（5例）。全体の形は小さいが刃の奥行きは深い。素材別はハマグリ4，アサリ1となるが，小型の貝殻が選ばれているかのようである。殻の種別ではL3例，R2例となる。

Ⅳ　群・腹縁の中ほどに自然面を残して刃を付けたもので，腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている<挿図3—20，21，図版2—20>　（梶山貝塚出土中貝刃に例がない）。

総数22例。刃部の状態はⅡ群a類とあまりかわらない。素材別はハマグリ11，カガミガイ5，オキシジミ2，シオフキ2，アサリ1，サルボウ1となる。殻の種別ではL11例，R11例と同数である。自然面を狭む左と右の刃のようすは大きく異なるところはないが，後背縁側に付けられた刃の方がいくぶん幅広い。

以上に述べた形態の中で最も多く認められるのはⅡ群b類で，第2表にみられるように全体の61.3%を占める。次いでⅠ群b類14.3%，Ⅲ群a類5.8%，Ⅰ群a類5.4%，Ⅱ群a類5.1%，Ⅳ群4.1%，Ⅲ群b類3%，Ⅲ群c類1%となる。

形態と貝の種類については，アサリ，ウチムラサキ以外はすべてⅡ群b類が多数を占め

るが，オキシジミとシオフキは目立って多いというほどではない。オキシジミやシオフキのように殻頂がほぼ中央にあって，殻の小さい，厚みのない貝はそれほど刃の位置や幅に意味をもたないのかもしれない。カガミガイはⅢ群にまったく例がない。ウチムラサキはハマグリより殻が厚く，Ⅲ群a類にみられることはかなり強い力を加えて用いられたことを思わせる。

遺跡別にみると，梶山貝塚，北川貝塚，マカンド貝塚などの前期の資料の場合，Ⅱ群b類の数が少なく，梶山貝塚では過半数を割り，北川貝塚ではⅡ群a類が，マカンド貝塚ではⅠ群a類が多数を占める。これに対して，向台貝塚，今島田遺跡（貝塚），加曾利北貝塚，加曾利南貝塚，子和清水貝塚などの中期の資料はⅡ群b類が70％以上を占め，他の形態はきわめて少ない。しかしながら，数こそ少ないがⅠ群a類とⅢ群a類が存在したことは，Ⅱ群b類と異なる用途をもっていたことを考えてよいかもしれない。このようなことは，加曾利南貝塚，称名寺貝塚などの後期の資料にも，同様な傾向が認められ，ハマグリ・カガミガイが多く，刃部は整っている。

殻の種別を集計するとL287例，R252例となる。ハマグリ，オキシジミ，アサリ，ミルクイ，ウチムラサキは傾向としてややRが多い。カガミガイはL 101例，R12例ときわめてLが多い。このことから殻頂がほぼ中央にあるカガミガイでも，使用する際，Lでなければならない何らからの理由があったのではないかと思われるが，ここではL，Rの比較よりも刃の位置が一般に後背側に寄っていることに注目しておきたい。

3

前項で貝刃を刃の位置および幅によって4群8類に細分したが，刃を中心にしてみた場合，刃の奥行きが深いものと浅いもの，剥離の幅が規則的なものと不規則なものに大別できる。刃の形状の変化は使用の結果生じたのでなく，刃を加工する際の技術と関係するものと考えられる点がみうけられるので，製作技法（刃の加工）と使用痕の関係について二三述べておきたい。

貝刃の刃は調べた範囲では，いずれも内側からの押圧剥離によって付けられているが，刃部加工は細部の加工方法によっておよそ6つのタイプに区分できる（第3表）。識別可能総数は527例である。

A型　＜挿図1－2，8，同2－9，11，同3－17，20，図版1－28，同2－20，同3－20＞

不規則的な幅で剥離を連続的に加えたもの。剥離具の角度が一定せずに乱雑な剥離が行なわれており，たとえば同一個体の中でも幅が3㎜から1㎝以上まで変化するため，きわめて粗雑な形状を呈す場合が多い（11，17）。また，剥離の深さも一定せず，次に述べるB型の場合と異なって，刃の後縁が波状に連なるとはかぎらない（11，17）。総数180例。

B型　＜挿図1－1，3，4，5，6，7，同2－12，13，図版1－27，同2－30，31，32，同3－27，30，32＞

規則的な幅で剥離を連続的に加えたもの。

総数208例。剥離の幅は狭いものが3～5㎜，広いものが6～8㎜程度である。前者は刃先と刃の後縁がなす角度が70°～90°で，剥離の深さは3㎜前後となり，刃の後縁には磨滅のあとが顕著にのこる（4，6，12，13）。個体によって剥離の幅は多少異なるが同一個体中の幅はほぼ一定しているのが本型の特徴といえる（1，3，27）。Ⅱ群b類に属するものに最も多い。また，傾向として，前背縁側から後背縁側に向かって剥離の幅，奥行きが次第に狭まる例がいくつかみられ，この場合は剥離の順序もだいたいこの方向に行なわれたと認めてよさそうである（4）。

C型　＜挿図2—16，同3—18，21，図版1—29，同3—29，34＞

A型と同様な手法で粗い剥離を行なったうえで（1次加工），さらに不規則な剥離を連続的に加え（2次加工），鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。

総数64例。刃の奥行きは深く，1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。また，2次加工によってできた刃先の角度は70°前後が一般である（16，21）。ハマグリ以外に類例はなく，Ⅱ群b類に多いが，Ⅰ群b類においても数こそ少ないがその半数をみる。

D型　＜挿図2—14，同3—19，図版2—33，図版3—33＞

A型と同様な手法で粗い剥離を行なったうえで（1次加工），さらに規則的な剥離を連続的に加え（2次加工），鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし，2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。2次加工によってできた刃先はC型と同様に75°前後の角度をもっているのが一般的である。

総数25例。刃の奥行きは深く，1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。ハマグリ以外に類例はない。

E型　＜挿図2—10，図版1—10，同3—10＞

B型と同様な手法で剥離を行なったうえで（1次加工），さらに不規則的な剥離を連続的に加え（2次加工），鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし，2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。

総数13例。全体で最も少なく，ハマグリ以外に類例はない。1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。10は1次加工で，1～1.5㎝の幅で奥深く剥離し，さらにその中に4～5回の剥離を行なった例である。2次加工の剥離角度はかなり急で約80°になっている。

F型　＜挿図2—15，図版1—15，26，同3—15＞

B型と同様な手法で1次加工を行なったのち，さらに規則的な剥離を連続的に加え（2次加工），鋭利な刃先をつくり出すもの。2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。2次加工の剥離角度は70°前後である。

総数37例。ハマグリに類例が多いが，カガミガイに4例ある。1次加工と2次加工の剥離の方向はこの場合も一致しないことがある。

以上の結果から，剥離の型式はB型が最も多く，A型，C型，F型，D型，E型の順になる。つまり，全体的にみると1次加工による場合（A，B型）が70％となる。その形態

別ではⅠ群ｂ類，Ⅱ群ｂ類の大部分がこれに属し，その他の形態ではＡ型が多い。Ⅰ群ｂ類はＡ型に33.8%，Ｂ型に46.7%みられ，Ⅱ群ｂ類はＡ型に25.8%，Ｂ型に46.8%みられる。Ⅰ群ｂ類は形態がⅡ群ｂ類に類似し，総数でこれに次ぐ点などを考えれば，きわめて近縁的な一群と考えてさしつかえないであろう。Ⅲ群ａ類，ｂ類，ｃ類は形態そのものが粗雑であり，刃部および背面の磨滅や剥落が著るしい。刃先にみられる小さな剥離痕は２次加工によるものか，使用の痕跡か識別しがたい例が多い。

いま述べた貝刃の形態と製作技法の組合せの要素としては，素材となった貝の種類による技術的な制約もあると思われる。ハマグリが各型式に含まれることは，２次加工が可能な素材であることを示すものであろう。なお１次加工だけの場合もハマグリやカガミガイのように殻の厚い貝は，１回の連続剥離で，ある程度整った刃を付け得たと理解してよいのではなかろうか。

使用痕については，擦痕，刃こぼれ，磨滅などが認められる。擦痕は腹縁寄りの背面から殻頂にむかって顕著にみられる。Ⅰ群ａ類とⅠ群ｂ類は後背縁側に擦痕をのこす例が多く，これらはいずれも使用の痕跡であり，ある期間継続して使用されたことを示すものにほかならない。擦痕の幅は0.1～0.2㎜のこまかいもので，背面なかばまで擦痕がとどくこともある。また，刃に対して60°～90°の角度で走ることがあり，多くの場合，右傾，左傾し，走向が一定しない。この部分は粗面となることが多い。刃こぼれは幅１～２㎜程度で連続するものと（33），刃先全体が剥げ落ちるものとがある（13）。前者はⅡ群ｂ類のＡ型に多い。後者はⅡ群ｂ類のＢ型に著るしく，とくにわずかにのこる刃先と刃の後縁がなす角度は急で，刃の後縁の磨滅が著しい。刃先の磨滅は一般には，刃先から刃の後縁にかけてみられる。なかには刃部以外の腹縁にまで及ぶことがある（34）。刃先は波状の突出部が完全に消滅するまでになった例（29，34）と，原形をとどめる例（21）がある。カガミガイおよびⅠ群ａ類，Ⅰ群ｂ類のハマグリの中には，背面上部約４cm^2の範囲にわたって磨耗を認める例があり（30，31），これは明らかに擦痕と異なっている。Ⅲ群ａ類，ｂ類ｃ類は背面の擦痕，刃部の剥げ落ち，磨滅の状態がはげしく，かなり強い力を加えて使用したものであろう（29）。このほかに，使用のさい生じた欠損の例もあると思われるが，風化などのため識別しがたく，触れなかった。

4

前２項で述べた貝刃の形態と製作技法の分析結果にもとずいて，それらの関係をみると次のようになる。

まず，刃幅の広狭によってまとめてみると，

(1) 刃幅の狭い貝刃（Ⅰ群ａ類，Ⅱ群ａ類，Ⅲ群ａ類，Ⅲ群ｃ類，Ⅳ群）では，製作技法は114例中，Ａ型＝67例（58.8%），Ｂ型＝22例（19.3%），Ｃ型＝12例（10.5%），Ｆ型＝８例（7.0%），Ｄ型＝３例（2.6%），Ｅ型＝２例（1.8%）となる。

(2) 刃幅のやや広い貝刃（Ⅰ群ｂ類）では，製作技法は77例中，Ｂ型＝36例（46.7%），Ａ型＝26例（33.8%），Ｃ型＝８例（10.4%），Ｄ型＝３例（3.9%），Ｅ型＝２例（2.6%），Ｆ型＝２例（2.6%）となり，１次加工だけのＡ型およびＢ型が80.5%を占める。

(3) 刃幅の広い貝刃（Ⅱ群b類，Ⅲ群b類）では，製作技法は336例中，B型＝150例（44.6%），A型＝87例（25.9%），C型＝44例（13.1%），F型＝27例（8.0%），D型＝19例（5.7%），E型＝9例（2.7%）となる。なお，このうちB型，E型，F型の製作技法はⅡ群b類に限定されている。

要約すると，刃幅の狭い貝刃では，A型，B型の技法による（1次加工だけで製作された）貝刃が89%，刃幅のやや広い貝刃では，A型，B型の技法による貝刃が80.5%，また刃幅の広い貝刃では，A型，B型の技法による貝刃が70.5%で多数を占め，とくにB型がその約半数を占める点が注目される。したがって，全体としては1次加工だけで製作された貝刃が多数を占めていることが知られる。

一方，各群・類別に主体的な製作技法との関係をみると，第3表に示したように，同じ1次加工でもA型が主体をなすのは，Ⅰ群a類，Ⅱ群a類，Ⅲ群a類，Ⅲ群c類およびⅣ群であり，B型が主体をなすのは，Ⅰ群b類とⅡ群b類である。また，Ⅲ群b類ではC型が約3分の2を占めている。

この結果から，貝刃の形態と刃の付加手法には絶対とは言えないまでも，ある程度の組合わせが存在することが認められる。したがって，梶山貝塚出土の貝刃が形態と製作技法の組合わせに一定の傾向をもっていたことは，決して特殊――あるいは偶然の結果ではないと考えられる。今回の検討においては，資料のうちに梶山貝塚出土例も含めて扱っているが，589例中101例（17.1%）にすぎず，これらを除外しても，この傾向は否定できない。

ただ，梶山貝塚出土例とそれ以外の諸例について，形態と製作技法との関係，比率をみると，梶山貝塚出土例では1次加工49例，2次加工52例で，さほど差がないのに対し，今回の検討結果では前述のように，1次加工が70.5%と大多数[注14]を占めている点が注意される。今回の検討資料の時間的範囲は早期から後期まで入っており，各時期的にみたときには資料がかなり片寄るため，時期別に，形態，製作技法，素材の変化等を分析できなかったので断定はできないが，さきの結果を一応南関東地方の貝塚の平均値として考えた場合，梶山貝塚出土例が示す数字は，少くとも時期または地理的環境（あるいはその両方）によって素材の相違や，形態・製作技法が異なる可能性を暗示するものであろう。たとえば，第1表に示したように，同じ前期でも梶山貝塚よりもかなり奥に入った北川貝塚（花積下層式期）では，貝塚を形成する貝の大部分はきわめて小型のハマグリであり，貝刃として使用するには不適当であったことが考えられ，シオフキ製貝刃が19例，ハマグリ製貝刃（北川貝塚においては大型のもの）が10例となっており，また，今島田遺跡（貝塚）においては，カガミガイ製貝刃が21例，ハマグリ製貝刃が11例で，比較的近距離にある向台貝塚，加曾利北貝塚，加曾利南貝塚，さらに子和清水貝塚など，同じ中期の諸遺跡発見例と異なった傾向をもつことなどを注意したい。

次に使用痕については，資料の90%以上に明確に認められる。使用痕は主として刃先と刃の後縁の磨滅で，ほかに殻の背面に残った擦痕がある。刃部の磨滅はⅠ群b類，Ⅱ群b類，Ⅲ群a類のうち，1次加工（B型の製作技法により刃を付けたもの）に目立っている。

このように，刃部の磨滅はかなり多いのであるが，刃の運動方向を示す明瞭な擦痕が残

っている例は少ない。ただ，Ⅰ群ａ類，Ⅱ群ａ類のように刃幅の狭いものでは，背面にしばしば不特定方向あるいは斜行する擦痕がみられる。２の梶山貝塚出土の貝刃は後者の典型的な例である。この種の貝刃においては，刃と運度方向のなす角度は60°～90°程度と測定され，梶山貝塚出土の貝刃の報告で指摘したように，scraper（掻器）としての機能が考えられる。しかしながら，今回，多数の資料を調査してみると，Ⅱ群ｂ類のように刃幅の広い貝刃においては，刃先全体に磨滅がみられ，さらに刃に接続する腹縁もやや広い範囲にわたって磨滅しており，一方，殻の背面には刃幅の狭い貝刃にしばしばみられるような擦痕はほとんどないと言ってよい。刃の運動方向を証する確実な痕跡は確認できなかったが，刃の幅が広いこと，刃全体が平均的に磨滅し，さらに腹縁にまで及んでいる点で，この種の貝刃には掻器としての機能ばかりでなく，刃を前後――刃と同一方向――に動かした一種の切断具として製作，使用された可能性が多分にあると考えてよいかもしれない。

最後に貝刃の素材――とくに，殻の左右別――の問題に触れておきたい。梶山貝塚出土例だけについて言うと，前に報告したように，Ｌ＝287例（53.3％），Ｒ＝252例（46.7％）で，その差はきわめて少なく，刃幅によって（前に述べたのと同じ一群を単位とする）大別してみても，⑴ 刃幅が狭いものでは，114例中，Ｌ＝54例（47.4％），Ｒ＝60例（52.6％）。⑵刃幅のやや広いものでは，78例中，Ｌ＝39例（50.0％），Ｒ＝39例（50.0％）。⑶刃幅の広いものでは，347例中，Ｌ＝194例（56.0％），Ｒ＝153例（44.0％）で，ＬとＲはほぼ半数となっている。したがって，梶山貝塚出土例における数字は，やや差がありすぎると思われるが，この点も時期的あるいは地域的問題との関連を考えさせるものである。

調査結果の概要は以上のとおりである。地域的，時間的な面で資料に片寄りがあり，方法論的にも不備な点はまぬがれがたいため，必ずしも所期の目的を達したとは言いがたい。しかしながら，少なくとも，貝刃はきわめて素朴な形態を有する貝製品であるが，明らかに利器として使用されたものであり，形態と製作技法にある程度一定の組合せが存在するなどの点で，縄文時代における利器の一形態として認められるべきものであることは確実になったと言えよう。

貝刃については未解決の問題が少なからず残っている。それらについては，さらに資料の蓄積と検討を行ない，機会をみて本稿の欠を補うつもりである。

注

⑴ 西村正衛「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚―第２・３次調査」早稲田大学教育学部学術研究 3号 1954年

⑵ 西村正衛・金子浩昌「千葉県香取郡鎌崎貝塚」古代 35号 1960年

⑶ 加曾利南貝塚Ⅳ―２トレンチ23―24グリット，第４層（安行Ⅰ式）よりカガミガイ製貝刃が出土していることを後藤和民氏から御教示いただいた。

⑷ 芝崎 孝「貝刃」下総考古学 1 1964年

⑸ 神沢勇一・川口徳治朗「梶山貝塚出土の貝刃について」神奈川県立博物館研究報告 第１巻第２号 1969年

⑹ 赤星直忠「横須賀市吉井城山第１貝塚調査概報⑴」横須賀市博物館研究報告（人文科学）６号

1962年
(7) 神沢勇一「横須賀市吉井城山第1貝塚出土の骨角牙器・貝製品(1)」横須賀市博物館研究報告（人文科学）6号　1962年
(8) 赤星直忠「横須賀市吉井城山第1貝塚調査概報(2)」横須賀市博物館研究報告（人文科学）7号　1963年
(9) 神沢勇一「横須賀市吉井城山第1貝塚出土の骨角牙器・貝製品(2)」横須賀市博物館研究報告（人文科学）7号　1963年
(10) 熊野正也「今島田遺跡」市川市文化財調査報告第1集　1969年
(11) 高橋良治・塚田　光・小片　保「千葉県子和清水貝塚調査概報」考古学雑誌　第49巻第2号　1963年
(12) (2)に同じ。
(13) 千葉県教育委員会「館山鉈切洞窟」　1953年
(14) 梶山貝塚出土例については，その後，さらに検討を加えた結果，101個全部について類別を行なうことができた。したがって，前報告では，有効資料が70例であったが，ここでは101個の分析結果を使用した。しかし，前回，今回とも比率はほぼ同じである。

第1表　遺跡別にみた貝刃の素材

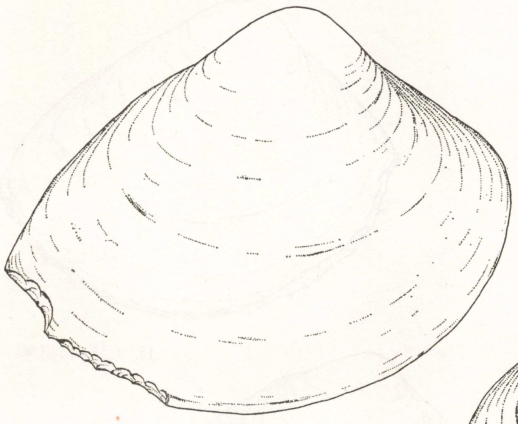
No.	遺跡	時期	ハマグリ・チョウセンハマグリ	カガミガイ	オキシジミ	シオフキ	アサリ	バカガイ	ミルクイ	ウチムラサキ	サルボウ	計
1	千葉県・鴇崎貝塚	早期	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2	神奈川県・吉井城山第1貝塚	早期	24	4	0	1	1	4	2	3	0	39
		中期	6	0	0	0	0	1	3	0	0	10
3	神奈川県・梶山貝塚	前期	94	5	2	0	0	0	0	0	0	101
4	神奈川県・北川貝塚	前期	10	2	3	19	7	0	0	0	1	42
5	神奈川県・マカンド貝塚	前期	10	1	13	1	1	0	0	0	0	26
6	千葉県・向台貝塚	中期	91	55	2	1	1	0	0	0	0	150
7	千葉県・今島田遺跡（貝塚）	中期	11	21	0	3	0	0	0	0	0	35
8	千葉県・加曾利北貝塚	中期	62	14	1	0	0	0	0	0	0	77
9	千葉県・加曾利南貝塚	中期	30	2	1	3	0	0	1	0	0	37
		後期	33	11	0	6	0	0	8	0	0	58
10	千葉県・子和清水貝塚	中期	5	3	0	0	0	0	0	0	0	8
11	神奈川県・称名寺貝塚	後期	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
12	千葉県・鉈切洞窟	後期	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計			380	120	22	34	10	5	14	3	1	589

第2表　貝　刃　の　形　態

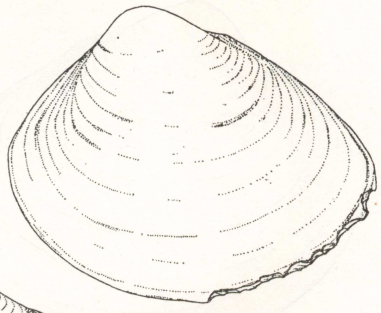
形態＼貝・殻の種別		ハマグリ (L)	ハマグリ (R)	カガミガイ (L)	カガミガイ (R)	オキシジミ (L)	オキシジミ (R)	シオフキ (L)	シオフキ (R)	アサリ (L)	アサリ (R)	ミルクイ (L)	ミルクイ (R)	ウチムラサキ (L)	ウチムラサキ (R)	サルボウ (L)	サルボウ (R)	バカガイ	類別集計	累計
I	a	17		3		4		1		3		1		0		0		5 破損品のため分類不可能	(10)	(19)	29
		(7)	(10)	(2)	(1)	(0)	(4)	(0)	(1)	(1)	(2)	(0)	(1)							
	b	59		12		3		3		1		0		0		0			(39)	(39)	78
		(27)	(32)	(9)	(3)	(1)	(2)	(2)	(1)	(0)	(1)									
II	a	10		4		4		9		0		0		0		0			(18)	(9)	27
		(8)	(2)	(3)	(1)	(1)	(3)	(6)	(3)											
	b	210		89		5		14		0		13		0		0			(183)	(148)	331
		(86)	(124)	(82)	(7)	(2)	(3)	(8)	(6)			(5)	(8)							
III	a	21		0		1		3		3		0		3		0			(12)	(19)	31
		(9)	(12)			(1)	(0)	(1)	(2)	(0)	(3)			(1)	(2)					
	b	15		0		1		0		0		0		0		0			(11)	(5)	16
		(11)	(4)			(0)	(1)													
	c	4		0		0		0		1		0		0		0			(3)	(2)	5
		(2)	(2)							(1)	(0)									
IV		11		5		2		2		1		0		0		1			(11)	(11)	22
		(3)	(8)	(5)	(0)	(2)	(0)	(1)	(1)	(0)	(1)					(0)	(1)			
貝・殻の種別集計		(153)	(194)	(101)	(12)	(7)	(13)	(18)	(14)	(2)	(7)	(5)	(9)	(1)	(2)	(0)	(1)		(287)	(252)	539
累　計		347		113		20		32		9		14		3		1					

第3表　貝　刃　の　形　態

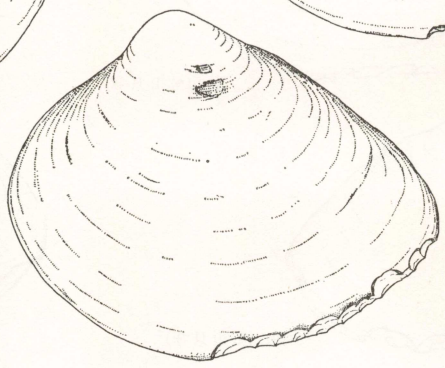
形態＼刃の型式		1次加工		2次加工				類別累計
		A	B	C	D	E	F	
I	a	16	7	3	0	0	2	28
	b	26	36	8	3	2	2	77
II	a	19	6	2	0	1	2	30
	b	83	150	35	18	9	27	322
III	a	14	9	3	1	1	3	31
	b	4	0	9	1	0	0	14
	c	3	0	0	1	0	0	4
IV		15	0	4	1	0	1	21
型式別累計		180	208	64	25	13	37	527



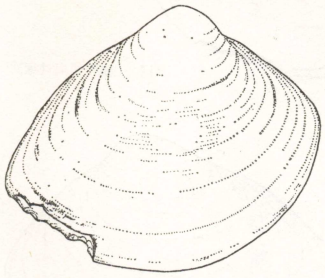
1 （吉井城山第1貝塚）



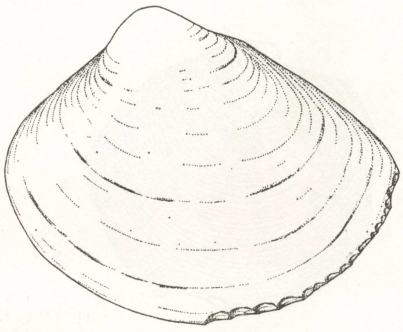
4 （子和清水貝塚）



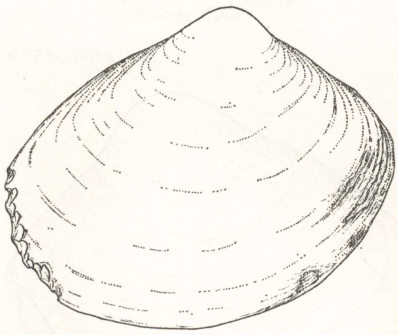
5 （向台貝塚）



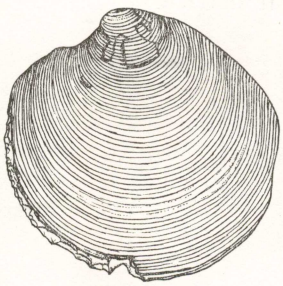
2 （梶山貝塚）



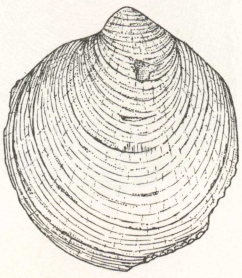
6 （加曽利南貝塚）



3 （向台貝塚）



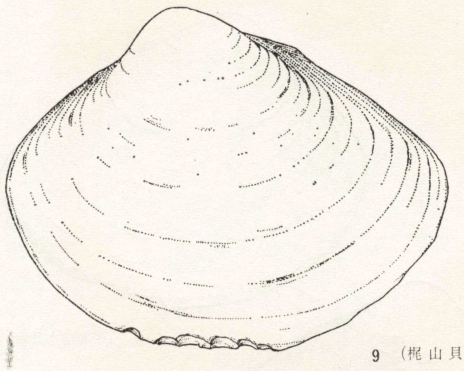
7 （今島田貝塚）



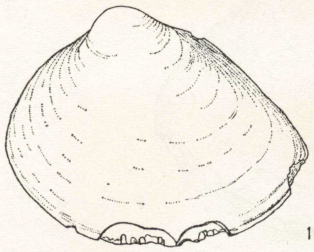
8 （北川貝塚）



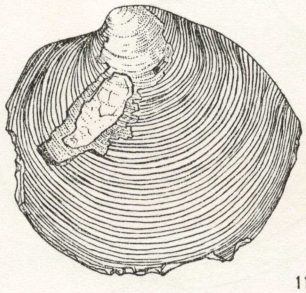
挿　図　1　　I 群　a類＝1．2．3
I 群　b類＝4．5．6．7．8



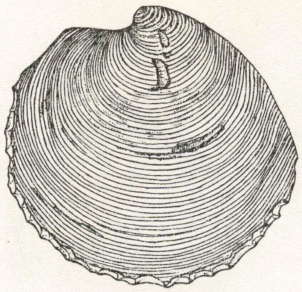
9 （梶山貝塚）



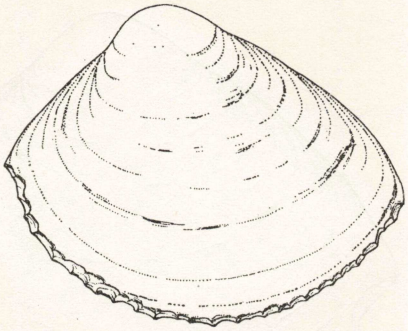
10 （梶山貝塚）



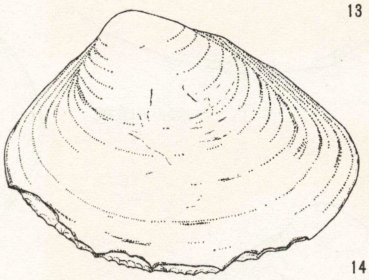
11 （梶山貝塚）



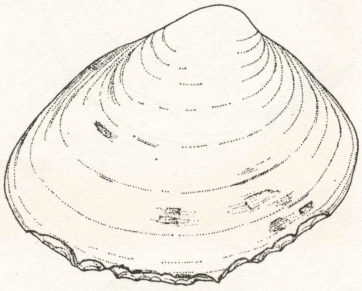
12 （加曽利北貝塚）



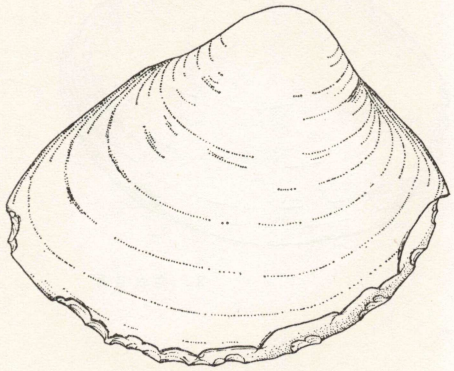
13 （子和清水貝塚）



14 （加曽利南貝塚）



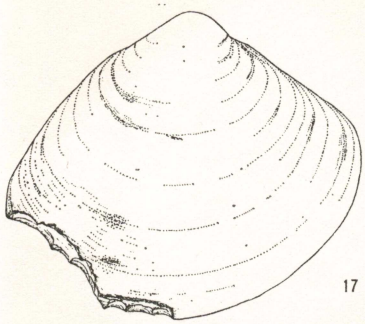
15 （吉井城山第1貝塚）



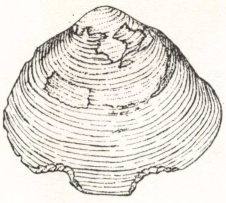
16 （向台貝塚）

0 10cm

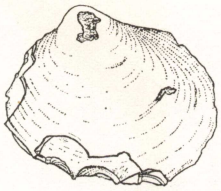
挿　図　2　　II 群　a類＝9．10．11
II 群　b類＝12.13.14.15.16



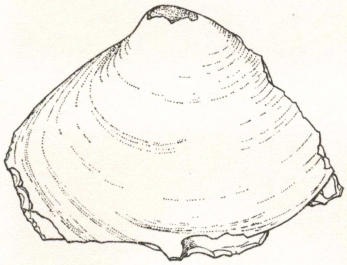
17 (向台貝塚)



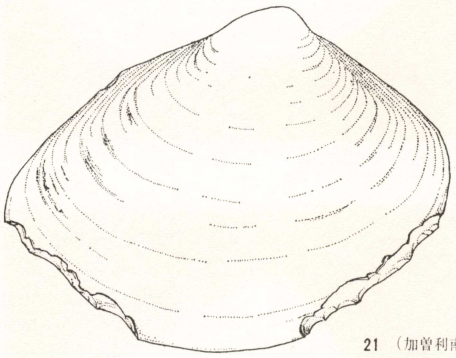
20 (北川貝塚)



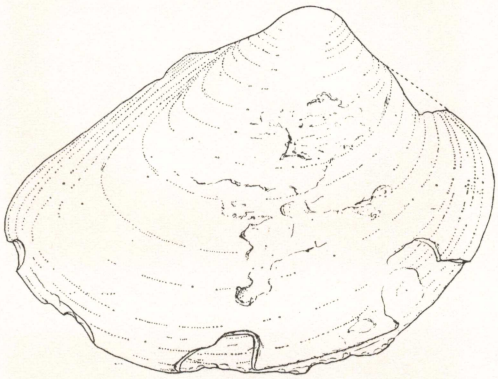
19 (梶山貝塚)



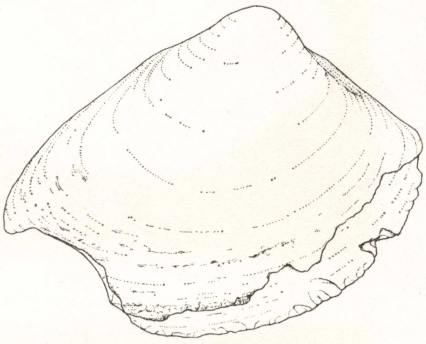
18 (梶山貝塚)



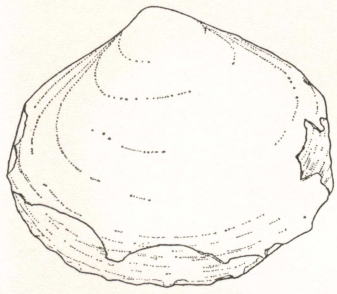
21 (加曽利南貝塚)



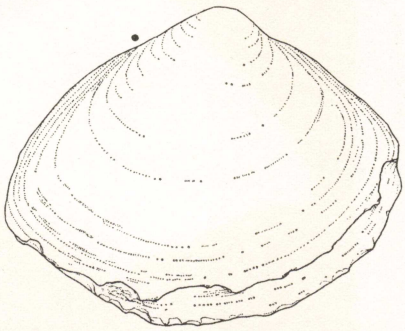
22 (鵠崎貝塚)



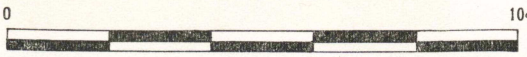
23 (鵠崎貝塚)



24 (鉈切洞窟)



25 (鉈切洞窟)

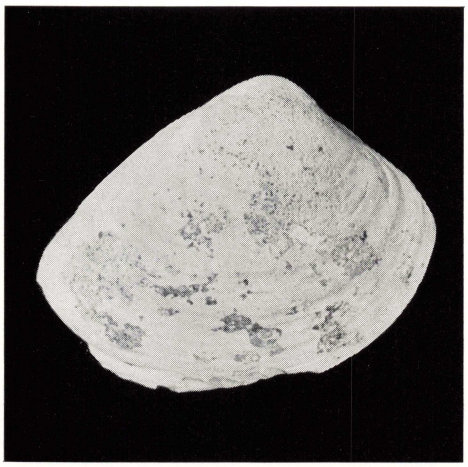


挿　図　3　　(上) III 群　a類 = 17.
III 群　b類 = 18.
III 群　c類 = 19.
IV 群　—— = 20. 21.

(下) I 群　b類 = 22.
II 群　b類 = 23. 24. 25.



26　（Ⅰa）　59×72mm



27　（Ⅰb）　55×71mm



10　（Ⅱa）　53×68mm



15　（Ⅱb）　51×66mm



28　（Ⅲa）　50×53mm



29　（Ⅲb）　53×67mm

図 版 1　10＝E型（梶山貝塚）　15＝F型（吉井貝塚）　26＝F型（梶山貝塚）
27＝B型（梶山貝塚）　28＝A型（梶山貝塚）　29＝C型（梶山貝塚）



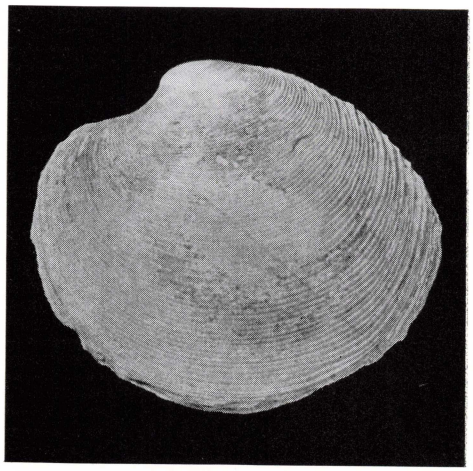
19　（Ⅲc）　42×49mm



20　（Ⅳ）　42×52mm



30　（Ⅱb）　63×72mm



31　（Ⅱb）　61×73mm

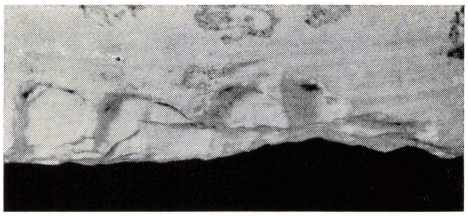


32　（Ⅱb）　53×69mm

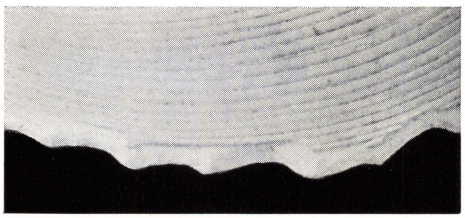


33　（Ⅱb）　60×84mm

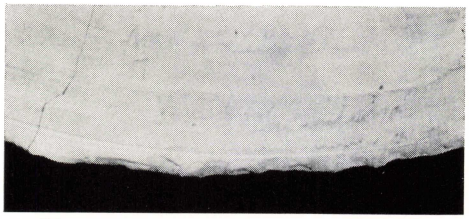
図 版 2　19＝D型（吉井貝塚）　20＝A型（北川貝塚）　30・31＝B型（称名寺貝塚）
32＝B型（吉井貝塚）　33＝D型（梶山貝塚）



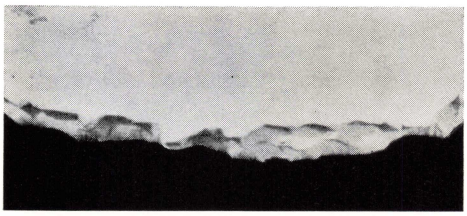
27



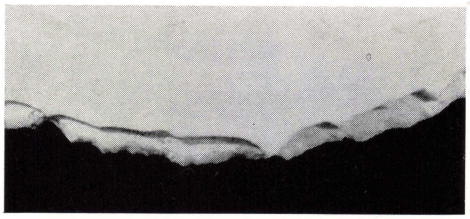
30



33



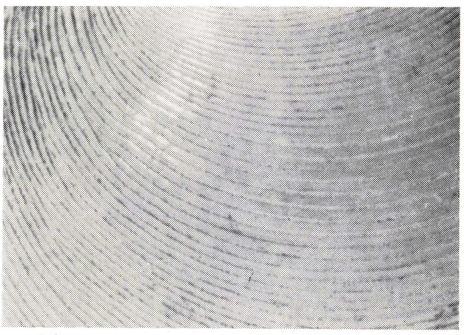
32



15



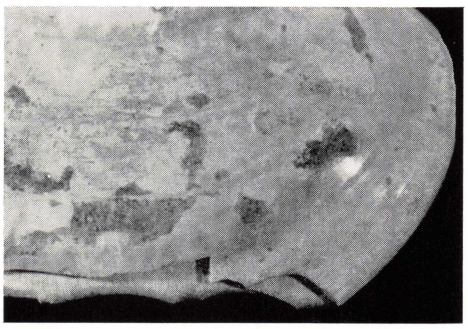
20



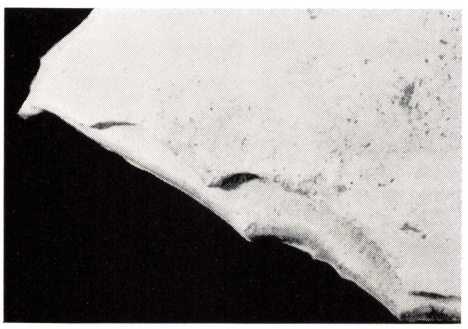
31



10



34



29

図 版 3　A型＝20　B型＝27. 30. 32　C型＝29（刃先磨滅）　34（刃先磨滅）
D型＝33　E型＝10（擦痕）　F型＝15　背面の磨耗＝31